チームとしての就学前教育の役割と発信について
－「人と会いにくい」社会情勢の中で、幼稚園にできることは何か－

学籍番号　199203
氏　名　蔭山　純子
主指導教員　戸田　有一

１．研究の背景と目的

令和元年度までの入園式は、桜の花びらが舞い散る中で行われ、子どもも保護者も緊張しつつも期待いっぱいで幼稚園生活はスタートしていた。しかし、令和２年度入園式は、紫陽花が咲き誇る６月に行われた。喜びのなかに不安の交錯するスタートであった。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、全国の学校園では令和２年２月末から臨時休業措置がとられた。４月に入ってからも、大阪府を含む７都府県に緊急事態宣言が発令され、その後全都道府県に対象範囲が拡大された。それにより、令和２年度の新学期は見通しがたたないままの開始となり、入園式をはじめとする園行事の延期が余儀なくされた。感染者や死者の急速な増加に伴い、幼い子どもの命を預かる幼稚園現場では、緊迫感や不安・恐怖感が高まっていく。現場の教職員はそれらと向き合いながら、経験がないために予測が困難な中で、感染症予防や学びの保障などについて臨機応変な対応が求められることとなった。そのような誰もが未だかつて経験したことが無い社会情勢の中で、「子ども一人一人への学びの保障」と「保護者の安心」のために、園にできることは何かを考え、多様な援助ニーズへの効果的な対応を探っていくことにした。コロナ禍での発信の工夫の必要性をこれまで以上に強く意識するとともに、現場の多様な援助ニーズへの理解を深める方法や効果を分析し、今後も起こり得る危機的状況に応じられるよう、将来への実践知の継承を図ることを研究の目的とした。

２．実践内容と研究の方法

１）　調査方法

本研究では、目的を達成するために実習園において、教員へのアンケート（主に記述）調査と聞き取り調査、幼児へ観察調査を継続して実施した。さらに、このように「人と会いにくい」生活となった今、園と家庭の生活がつながる工夫によりその重要性を明らかにできるよう研究を進める必要性を感じたことから、保護者への聞き取り調査やアンケート調査を合わせて実施し、次の事柄を調査することにした。

①コロナ禍における教師の気づきや発見について、培われるもの（よかったこと）・失われたもの（よくなっかたこと）・変わらないこと・これからにつなげたいこと（つながること）について実践を通した意見を収集し、まとめる。

②コロナ禍における保護者の気づきや意識の変容をアンケートから考察する。また、地域や外部からの意見収集について、学校協議会報告、ホームページなどから情報を得ることで発信について検証する。

上記２点を調査目的とし、主に、アンケート調査やエピソード収集、聞き取り調査を通して、研究の目的の達成に向けて取り組むこととした。

２）「人と会いにくい」とは

新型コロナウイルス感染症によってもたらされた新しい生活様式を築いていくために、様々な先行研究で課題として挙げられている「人と人とが触れ合うこと、寄り添うことなど、子どもの育ちや経験にとって大事なこと」の捉え方を、どう考え、どのように工夫しながら、教育実践に取り入れていくかが求められる。ここで言う「人と会いにくい」という文言は、人と交流しにくい、対面で関わりにくい、ウェブだけでは伝わりにくい、心を感じにくい等という状況を指している。そのような中で、教員はどのように感じながら、体験を通して学ぶ教育を進め、保護者、地域へ発信していくのだろうか。コロナによってもたらされた誰もが初めての園運営、学級経営、幼児理解、保護者対応、地域連携等に視点をおいて、教員のありのままの姿や思い、実践を収集し、記述だからこそ伝わる教員や保護者の意見を丁寧に捉えていった。

３．結果と課題

コロナによって、様々な気づきや発見があった。培われるもの、失われたもの、変わらないこと、これからにつなげたいことなど、改めて幼稚園教育の本質に迫る機会となり、その役割と重要性を感じることができた。子どもたちへはコロナに対する適切な捉え方を繰り返し知らせることで不安を和らげた。保護者へのタイムリーな継続した正しい情報の提供と、コロナ禍で制限がある中での遊びの工夫やピンチをチャンスに変える行事の在り方などを視覚化、言語化してその都度発信し、子どもの育ちを「見える化」したことが安心につながった。また、以前にも増して全教職員が全園児をみる体制強化や感染防止や安全対策について一貫した対応をチームで進めていく繰り返しの発信は、保護者の安心安全に効果的に作用したといえる。人とのつながりが希薄になる中だからこそ、地域の見守りの方への挨拶や通信を意識し、「一瞬を大事に」位置づけることで、信頼を深めることが分かった。ピンチの時こそ子ども一人一人の発達を踏まえ、個々の興味関心や日々の状態を丁寧に見取り、豊かな遊びから確かな学びとつながる工夫を凝らし、「教育の質の向上のチャンス」と捉えて日々の実践を重ねることが重要である。一人一人の教職員がコロナ禍での発信の工夫の必要性を強く意識し、現場の多様な援助ニーズに対応するべく、「安全安心」という目標へと意識を共有し話し合うことに時間をかけ、これまで培ってきた「阿吽の呼吸」とも言うべき教師のチーム力を危機管理意識と結び付け、「チーム援助の基盤」としたことが、「安心」「信頼」につながり、家庭と共に新しい生活様式の一歩を踏み出すことができたといえる。今後、アフターコロナに向けて、教育が家庭と共にある重要性を確認・検証しながら、チームとしての信頼をさらに強め、今後も起こり得る危機的状況に応じられるよう実践知のさらなる継承方法を探ることが課題である。そして、就学前教育の重要性を他園・他校種・地域へと発信し続け、その役割を果たしていきたい。